

第5回浜松地区大学再編・地域未来創造会議議事録

開催日時：2022年10月7日（金）10:00～11:10

開催場所：浜松市役所庁議室

出席者：・浜松市長	鈴木 康友（座長）
・浜松市議会議長	太田 康隆
・浜松商工会議所会頭	斉藤 薫
・浜松いわた信用金庫会長	御室 健一郎
・一般社団法人浜松市医師会長	滝浪 實
・公益財団法人浜松地域イノベーション推進機構 フォトンバレーセンター長	伊東 幸宏
・公益財団法人浜松地域イノベーション推進機構 次世代自動車センター長	望月 英二
・国立大学法人静岡大学学長	日詰 一幸
・国立大学法人浜松医科大学学長	今野 弘之

報道：7社

次第

- 1 開会
 - 2 市長あいさつ
 - 3 議事
 - (1) 静岡大学両キャンパスの将来像と大学再編に向けた工程表について
 - (2) 意見交換
 - 4 その他
 - 5 閉会
-

1 開会

(事務局 (浜松市企画調整部長))

本日はお忙しいところ、この会議にご出席いただきまして誠にありがとうございます。本日の出席者は、出席者名簿のとおりでございます。委員全員のご出席となります。ありがとうございます。

それでは、会議の開催にあたりまして、市長からごあいさつ申し上げます。

2 市長あいさつ

(浜松市長)

本日はご多用の中、日詰学長、今野学長、委員の皆様には、浜松地区大学再編・地域未来創造会議にご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。前回の7月5日の会議のときに、最後に次のステップを議論するために、まず静岡大学として静岡キャンパス、そして浜松キャンパスの将来ビジョンと再編に向けての工程表をお示しいただきたいということで、日詰学長にお願いいたしました。

本日はそのことに対して日詰学長からご説明をいただきまして、その後、皆様と再編・統合についてご議論していきたいと思っております。限られた時間でございますけれども、よろしくお願い申し上げます。

3 議事

(1) 静岡大学両キャンパスの将来像と大学再編に向けた工程表について

(事務局 (浜松市企画調整部長))

それでは、本日の議事に移ります。次第3「議事」ですが、ここからの進行は、座長であります浜松市長をお願いいたします。

(浜松市長)

それでは、次第に沿って議事を進めさせていただきます。まず議事の(1)静岡大学両キャンパスの将来像と大学再編に向けた工程表につきまして、日詰学長からご説明いただきたいと思っております。学長よろしく申し上げます。

(静岡大学学長)

冒頭にあたりまして、9月24日に本学で浜松キャンパス100周年の式典が行われまして、ご臨席賜り大変ありがとうございました。特に鈴木市長、斉藤会頭におかれましては、ご祝辞をいただきまして感謝申し上げます。また、今野学長におかれましては、祝電ならば

にお花までご頂戴いただきましてありがとうございます。本当にこれからも浜松に根付いたキャンパスを発展させていくことができるよう、努力をしてまいりたいと思っておりますので、何とぞよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

それから本日の資料でございますが、実は10月3日に鈴木市長からの使者の方が、静岡大学としての公式な将来ビジョンならびに大学再編までの工程表を示すよう要請をいただきました。それにつきましては、今日その全てに応ずることができませんで、そのことをまずもって、心からお詫びを申し上げたいと思います。申し訳ございません。

今日お持ちいたしましたのは、基本的にはこれまで学内で議論してきているもの、そして今審議中のものをお持ちさせていただいているということでございますので、いろいろな所からご批判を受ける覚悟でやってまいりました。なかなか成熟したものになっておりませんが、その辺りは一度お目通しをいただきまして、またいろいろご意見を賜ればと思っておりますので、その点、最初にお詫びさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

まずこれまでの経緯からご紹介をさせていただいた方がいいのではないかと思いますので、2ページ目でございます。これまでの経過がどういう形だったのかということ、少し振り返らせていただければと思っております。

浜松医科大学との法人統合・大学再編につきましての合意書は、平成31年3月29日に締結されております。その前段階で、学内でいろいろな意見がございまして、それがその一番上に記されているものでございます。これは学内の公式の会議でございます、企画戦略会議であるとか教育研究評議会、そういった場が出された意見でございます。

そういったものを集約しますと、そこにあるようないくつかの意見にまとめられているかと思えます。地域に根差した国立大学法人としての機能強化・大学法人全体の経営力強化が図られる。医学部が入ることにより大学のステータスが向上する。浜松医科大学との統合は、光医工学の運営にとって好ましい。非常に推進に関して前向きな意見があると同時に、その一方で6学部の総合大学としての規模を失い、地域社会におけるプレゼンス低下を招くのではないかなど、いくつかの懸念が出されています。そういう状況の中で、合意書が締結されたということでございます。結局、推進、それから慎重、両面からの意見が対立しているというような状況がございました。

その後、合意書が締結された後、令和元年7月12日に文部科学省から、高等教育局長、研究振興局長の連名で、「学校教育法等の一部を改正する法律等の施行について」という施行通知が発せられました。

これにつきましては、この一法人複数大学制度を活用するにあたっての留意事項という形で記されているものでございますけれども、この中に「関係大学はもとより、地元自治体等の関係者の理解を十分に得て進めるべきである」という文言が記されております。

合意書が締結されてはいるのですけれども、結局この施行通知が出されたということによりまして、そもそもこの一法人複数大学の制度を活用するにあたっての地元の理解とい

う枠がはめられたと、私は受け止めておりました。ある面で事情が変更されたというような状況が起こったと理解をいたしました。

そういう状況の中で、令和元年9月の末でございますけれども、本学の学長から再編に異論の強い静岡市に対して、協議会設置の申し出を行いました。そして、その協議会の設置が静岡大学将来構想協議会という名前を持って、令和2年1月から令和3年3月まで開催されました。そして、令和3年3月にその協議会としてのまとめが発せられたわけでございますが、その中には法人統合には理解を示すが、大学再編については非常に理解が十分でないという、そういう趣旨の内容が織り込まれておりました。

一方、浜松市におかれましては、鈴木康友市長が主催する浜松地区大学再編・地域未来創造会議が令和2年10月に開催されまして、これが本日まで続いているということでございます。その中では行政をはじめ、地域の経済界、医学界などオール浜松で法人統合・大学再編を応援していきたい。そして、法人統合・大学再編が地域のさらなる発展に資するものと大いに期待をしているという、そういう内容のコメントが出されているということでございます。

このような会議が続いている中であって、令和2年1月24日に地元の自治体の関係者の理解を求める文部科学省の意向を受けて、協議会が静岡市に設置されたわけでありましてけれども、その時点においてはまだ結論が出ないという、そういう状況の中で当初スケジュールの法人統合・大学再編が難しいという判断をなされまして、それで実施時期の延期がなされたということでございます。

そして、令和4年の3月31日でございますが、令和元年度国立大学改革強化推進補助金が浜松医科大学と私どもで3年間の補助金を受けたわけでございますけれども、その検討会の評価がなされたということでございます。C評価ということで、これは特に私どもにとって大変恥ずべきことではございますけれども、そのような評価が出されているということでございます。

その所見の中にいろいろな意見があり、これは検討会議の有識者の意見が出されたというものでございます。その中に、今一度原点に立ち返って、あるべき姿を考えていったらどうかとか、あるいは新たなビジョンを考えていくことも含め進めていくべきではないか。いろいろな所見が盛り込まれたということでございます。

このような状況の中であって、依然として本学の中に大学再編に関しての推進の意見、それから慎重、反対の意見、そういったものが交錯をしているという状況。さらに、静岡市の反対がある。そういう状況の中で、この施行通知といったものの存在があることによりまして、現行の大学再編というのが非常に難しい袋小路に入ったような状況になってしまった、ということでございます。

結局、私どもの大学の中でも、この分断、それから対立ではなくて、お互いに相互に協力し合える関係を構築していくということが必要ではないかと判断をさせていただきまして、将来に禍根を残さない方策を考えなければならないという結論に、私は達したわけで

ございます。

一方、改革を前に進めるということと、浜松医科大学との間の連携を強めるという視点も重要であるということで、まずは法人統合を先行させて、ルールやシステムの統一化、さらには効率化を図って、法人としての経営力を強化していくことを目指すということも必要ではないかと考えております。

法人統合を先行させることによって、法人が 1 つになることで、その後、両大学のあるべき姿を展望する場というものができるのではないかと期待がございまして、そのもとで、その後の展開をどうするのか、ここで大学統合という言葉を出したわけでございます。それから大学再編、現行案のモデルチェンジと書いてございますけれども、分断・対立を避けて相互に協力し合える関係を実現するモデルということで、ここに入れさせていただいているわけでありますが、そういったものが必要だと考えたわけでございます。

こういう観点から前回、唐突ではございましたけれども、あのような形で話をさせていただいたということで、背景としてはこういうものがあるということでございます。

それで 1 ページ目の所に戻りますが、静岡大学の将来といったものを考えるときに、今押さえておかなければならない社会状況、あるいは社会変化というものがあります。そういったものは、特にデジタル化、グローバル化といったものが進展しているということですし、あるいは知識集約型社会に入っていくと、社会や産業構造は大きく転換を始めている。片やそういうような傾向の中にあって、少子高齢化の進行、人口減少、地域の活力低下等々の課題がありまして、これは日本の大学が直面している 1 つの大きな課題ということになりますけれども、さらに 18 歳人口の減少というのは、どこの高等教育機関も直面する課題となっております。大学進学者数が、今の半分ぐらいになってしまうという非常に大きな課題がございまして、加えて、大学進学者に占める流出入者の差は静岡県が全国ワーストということになっておりますので、そのあたりを見据えた改革というものが求められているということでございます。こういう状況の中で、大学、高等教育機関が生き残っていくためには、やはり競争力を高めていくということが大事ではないかと考えております。

その中で、本学の場合の改革の大きな前提としましては、スケールメリットを追求していくということでありまして、その重要なパートナーになるのが浜松医科大学であります。真に競争力のある大学になっていくために、両大学が将来的に 1 つの大きな大学になるということが大事ではないかと考えたわけでございます。そこで大学統合という言葉を出したということでございます。このことによって大学間の壁がなくなり、教育研究において真の連携が生まれてくるのではないかと思います。

ただ、すぐそういうわけにはいきませんので、まずは法人統合を進めて、システム統合や予算の効率化等を実現しまして、そこで生み出された果実を教育研究に投入していく。さらに、浜松キャンパスを中心にいたしまして、このデジタル化社会に対応したり、それから、脱炭素化の社会に対応するための人材育成をするための新学部ないしは新学科を考

える。そして、技術集積都市浜松の発展に寄与していくような図式を考えていかなければいけないのではないかと考えております。最終的に大学統合となることは一番いいというのが、このビジョンの1つの流れです。

ただ、私が、前回唐突に大学統合というような言葉を持ち出したということもございまして、これにつきましては、浜松医科大学の皆様には大変不快な思いをさせてしまったということで、お詫びをさせていただきたいと考えております。

このことにつきましては極めてデリケートなことでありますし、事前に礼を尽くしてその発言をすべきだというご批判をいただいておりますので、非常に礼を欠いてしまったということに関しましては、甚だお詫びを申し上げたいと考えております。

3ページに入りまして、以上のような考え方で、法人統合を先行させてみたらどうかというのがこの図でございまして。両方の大学が、その図で1法人2大学となっているわけでありまして、現行の1法人1大学を1法人複数大学制度のもとに置くということで、いくつか検討をしていかなければならないことがあるのではないかと考えております。法人統合の検討にあたりましては、役員構成をどうするのかということですか、理事長体制をとるのか、あるいは両大学の学長のどちらかが理事長になるのか、その辺りについては今、両論併記ということになっておりますけれども、その辺りも視野に入れた検討をしていかなければならない。それから本部はどこに置くのかということ、これまで本学の立場ということがそこに記されておりますけれども、この辺りも検討が必要になってくるということでございまして。

この法人統合を行った上で、システムやルールの統一化によって業務や予算の効率化を図り経営力を強化していく。それから、法人全体の研究水準の引き上げ、学部再編、あるいは新学部の設置検討、さらには将来ビジョンの検討ということ踏まえまして、両大学の構成員が同じ方向を向いて検討できるというか、そういう環境が法人統合をすることによってできたら、一番望ましいのではないかと考えております。

そういう状況の中で大学再編に向かうのか、それから大学統合に行くのかという検討をしていくというような取組が必要であるというストーリーでございまして。

そして法人統合がされますと、4ページ目にあるような、図が描けるということになっております。この先に再編というものをどう見せるのかという議論が、当然入ってくるわけでありまして、まだ私どもの議論がそこまで至っていないということで、お許しいただければと思っております。

そしてDX・GXに関しての取組というものが進められているわけでもございまして、基本的に国の方でも成長分野に資する大学や高専への持続的な、継続的な支援というようなことで、今100億円ほど盛り込まれているわけでありまして、それが場合によっては…

(浜松市長)

意見交換の時間を作りたいので簡潔にお願いします。

(静岡大学学長)

分かりました。一応そういうことで、新学部の検討に向けての議論を進めるということでございます。

そして7ページ目に、静岡大学が最終的に目指す統合の形を考えてみるとこうなるということでございます。

そして8ページ目ですが、まずは3つほどのプロセスがあって、1つ目はスライド3の3ページ目で記させていただきました新法人立ち上げと新学部の設置を行う、その後に大学統合または大学再編を経た大学統合の工程ということでございます。これは新学部を設置することが挟まりますので、新法人発足が令和6年4月、新学部が設置されるのも令和6年4月ということで、その後、大学再編というものが検討されますと令和10年となります。現状から直接大学統合と新学部の設置を行う場合には、大学統合前に時間がかかるということでございます。

3番目は、新法人立ち上げと大学再編を行って、そのうえに大学統合を目指す場合には、大学再編といったところで、準備期間がどうしても必要になるので、令和7年4月ということになっています。その後、大学統合を目指すのかどうかという、そのような議論が当然必要になってくるということでございます。

そして9ページ目で、静岡大学の現在の取組、ならびに今後の取り組みの構想というものを見せていただいております、本学の第4期中期計画の事項と併せて示させていただいたということでございます。

非常に雑駁な説明で大変恐縮ではございますが、以上でございます。

3 議事

(2) 意見交換

(浜松市長)

ありがとうございました。

私自身、驚きを持って見ていたのですけれども、今学内での審議中ですか。今日、委員ではございませんけれども、浜松キャンパスの川田理事が来られていますので、川田理事からも審議状況について、あるいは浜松キャンパスの思いとか意見を教えていただければと。その上で皆様からご意見をいただきたいと思っております。

(静岡大学川田理事)

ありがとうございます。私も執行部の一員なので、なかなか言いにくいところはあるの

ですが、浜松キャンパスの皆様はどう思われているかということをお伝えということも、執行部の責任かなと思いますので、率直に意見を述べさせていただきたいと思っています。

まず今回、日詰先生が出されているのは、今学内で検討中だということで、日詰先生の私案だという取扱いで、浜松キャンパスからはかなり皆様、部局長が反対されているという案であるということは、率直に申し上げさせていただきたいと思います。

浜松キャンパス側は、今回の再編に非常に期待をしまして、先鋭的な 2 大学をつくるということをぜひ実現したいと思っております。医工情を中心に特徴がある研究とか教育を行う場所を作るということに非常に期待をしまして、そこに世界的な拠点があれば、世界中から人が集まって来るとか国内から人が集まって来ることが、実現できるのではないかと、大きな期待を持っているというのは間違いありません。そういう拠点ができれば、浜松市はもちろんのことですが、静岡キャンパスのある静岡市にも、静岡県とか、日本国内に大きな貢献ができるのではないかと考えています。

なぜ、今私たちは医工情連携に進みたいと思っているかということですが、工学部も情報学部もものづくり中心にやってきたのですが、時代が変わってきて、技術から人を中心にした世界に変わりつつあると思っております。人に寄り添った技術をこれから開発していかなければいけないと思っております。その絵の中で、やはり一番人に寄り添った学問というのは医学部だと思いますので、それと工学部とか情報学部が一緒になるということは、非常に大きな意味があって、ぜひこれを実現したいと私自身は思っています。

ですので、浜松キャンパスはぜひこれを情熱を持って、熱意を持って、責任を持って実現したいと思っておりますので、ぜひそれを理解していただいて支援していただいて、背中を押していただけないかなとは思っています。

浜松キャンパスは非常に大きなチャレンジで、大学名が変わってしまうとか、今までと全く環境が変わるといったところがありますので、でも自分たちの未来をかけて、そういう方向にチャレンジしたいという皆様熱い思いを持っておられると思いますので、ぜひ何とかこれが非常にうまく進むといいなと思っております。私たちは、そういう世界的な拠点を作るということ、覚悟と責任を持って取り組んでいきたいと思っております。

もちろん大学間、別大学でもできることはたくさんあるだろうということは、もちろんあるのですが、今まで浜松医科大学と浜松キャンパスは、非常にうまく連携ができていますので、別大学としてできることは、今ほぼやれているのかなというふうに思っております。これをより強固にしたいとか、強化していくとか、深くしていくと、深化していくという意味においては、やはり 1 大学で同じ運命共同体になってやっていきたいというところは、浜松キャンパス側の思いでございます。

私個人的な意見で最後一言だけ言わせていただきますが、合意書の取扱いが非常に気になっていまして、やはり大学としての約束で、法的な文書とか法的な約束だと思いますので、浜松医科大学の了解なく大きく変更してしまうというのは、やはりなかなか難し

いかなと思っています。それから今まで静岡大学の先輩たちが築いてこられた実績だとか、栄光に傷を付けてしまうのではないかと思っていて、それが教職員であるとか学生の誇りとかプライドにも、少し傷が付いてしまうのではないかというところは、大きく懸念しています。

私からは、長々としゃべりましたけれども以上です。

(浜松市長)

ありがとうございました。

それでは委員の皆様からご意見をいただきたいと思いますが、この再編のお相手であります浜松医科大学の今野学長からも一言お願いします。

(浜松医科大学学長)

合意書の件でありますけれども、合意書を日詰学長はこれまで連携協議会等で広く解釈しているということで、決して合意書を破棄するというつもりはないということをおっしゃってこられました。確かに合意書の中には、いろいろな疑義が生じた場合には、それに誠意を持って協議するという項目が第 6 項にあるのも事実であります。ただ、合意書の一番最初に書いていることは、静岡地区大学、浜松地区大学の 2 大学に再編する。それが一番最初に示されているわけであります。これが、この合意書の骨格であります。

従いまして、1 法人 1 大学の私案というふうにおっしゃいましたけれども、これは明らかに合意書に反するものであると思っております。

もう一点だけよろしいでしょうか。

(浜松市長)

はい。

(浜松医科大学学長)

私は、川田理事のご意見に賛同するところが大きいにありますけれども、これから大学が目指すものは、やはり未来でありまして、大学そのものの形、もしくは大学の存続ということよりも、我々のミッションだと思います。そのミッションは、教育、研究、社会貢献であります。教育、研究、社会貢献が、どのような形であれば最も理想的に実現できるのか。つまり幾多の有為な人材を輩出し、世界に冠たる研究成果を上げ、そして地域に貢献していく。まさに医療はそういうことをしてきたわけでありまして、このために資することを実現する。それが、今回の大学再編の在り方ではないかと思えます。

大学が存続しなければいけない。大学の形をそのままにしないではいけないということは、その次に来るべきものであって、我々のミッションを果たすことを最優先として考えるべきであると考えています。

そして、そのために、前石井学長の頃から我々が時間をかけて協議した結果が、この大学再編を伴う法人化ということであることを申し上げたい。そして、2つの法人ができるということは、1つの法人格をなくさなければいけない。このことについては、浜松医科大学の法人格を廃することを教授会でも了承を得ているのです。従いまして、ある意味、浜松医科大学の法人がなくなる。それをも覚悟した上で、未来に向けてチャレンジしようじゃないかというのが、この合意書でございます。以上であります。

(浜松市長)

ありがとうございました。

ここからは、委員の皆様からご意見を頂戴したいと思います。どなたからでも結構でございますが、いかがでしょうか。

(フォトンバレーセンター長)

今日は言いたいことがいっぱいあるので、お時間をいただいてもよろしいでしょうか。

まず2ページ目の所に、静岡市と浜松市との協議会のことが、両方とも令和2年からというふうに書いてありますけれども、静岡市とはもっと前から協議を重ねてきていますよね。これを見ると、そこが抜けてしまっています。

それから静岡市が反対していると。施行通知が出たから難しくて袋小路なんだと言っていますけれども、静岡市は何を懸念して反対をしているのか。どういう問題を指摘しているのかということに関して、あまりつまびらかにされてないですね。そこをまずきちんと、これまで整理してないだろうということはあると思うので、静岡市は何を懸念していて、何が解消できれば妥協できるのかというようなことに関して、それを教えてほしいというのが、まず第1点です。

2番目に、大学統合してスケールメリットということを盛んに強調していますが、組織論としてエンタープライズ型の生き方をするのか、あるいは会社なんかで分社化という方向で行くのか。今行政の場合ですと、中央集権でいくのか地方分権でいくのかというような議論があります。組織論ですとかシステム論で言うと、中央集権か自律分散かというような言い方をしますけれども、それはケースバイケース、状況によってどちらがいいかというのは、いろいろとあるとは思うんですね。現在のところ、静岡大学の中央集権的なやり方というのは、ちょっともう行き詰まっているのではないかと。この問題に関して、これで5年目、6年目ですか。1つのこういう問題を5年も6年も引きずって結論が出せないような組織というのは、ちょっと考え直した方がいいのではないかと。今の静岡大学の場合は、もっと機動性を重視する。そういう組織というのを考えて行くべきなのではないかと、こう思います。

それから3つ目、静岡キャンパスの将来ビジョンで、新学部を作ると言いましたね。その新学部を作るにあたっては、静岡大学に新学部を設置して、静岡キャンパスは今後こう

いう方向で持って行くんだという構想を立てられたということですね。それに関して、静岡市は何と言っているのか。静岡市はその構想に関して、これは大学統合とは別物だと言われれば、それは別物かもしれませんが、けれども静岡キャンパスの将来像が見い出せないというのが、私の聞いているところでは、静岡市が反対している 1 つの理由になっていると思うのですが、それに対する回答にはならないですか。新学部というのは、それに対して回答を出すつもりで構想されたのではないですか。というのが 3 点目になります。

それから 4 点目、この資料の先ほど説明を飛ばされましたけれども、5 ページ目の所に、DX 人材とかに関して、これらの人材育成に特化している学部はないと強調して書いてありますよね。これは元情報学部長として非常に失礼な書き方でね。DX 人材というのは、いったいどういう人材だと認識しているのですか。私の理解ですと、IT 人材というのはテクノロジーが中心で、インフォメーションテクノロジーですからね。IT 人材というのはテクノロジーを主に、中心に据えて人材育成をするということ。DX 人材というのは、その技術というのをサービスであるとかプロダクトであるとかにどう生かしていくのか。さらにそれを社会実装したときに、社会に与える影響、インパクトというのはどうなのか。あるいは、悪影響というのではないのだろうか。それからその社会のマインドというのを、どう変えていかなければいけないだろうか、というところまで含めて検討できる人材というのを DX 人材と、私はそう思っています。それはまさに、情報学部の 3 学科制の概念ですよ。それをこういう書き方をされるというのは、ちょっと悪い言葉ですけど、ふざけんじゃねえという思いで、私はこれを見ました。

それから工程表ですけど、これマイルストーンは分かりますけど、そこに達するために何をしなければならぬのか。それにはどれくらいの工数を要するのかだとか、そういう情報が全くないですね。これは単なるマイルストーンの羅列であって、これは工程表とは呼びたくないような代物。このままだとこれは、評価の対象にできないと思います。

それから最後に、これさつき見てぎょっとしたんですけど、3 ページ目に検討事項と書いて、本部は静岡大学静岡キャンパスに設置と書いてありますけども、これは検討事項を書くのであれば、本部をどこに置くかとか、あるいは理事長はどう選任するのかとか、これは検討事項ではなく検討事項に対する意見じゃないですか。先ほど、浜松医科大学に事前に礼を尽くしておっしゃっていましたが、これはちょっと無礼な書き方だと思います。以上です。

(浜松市長)

いろいろご意見をいただきましたけれども、静岡市のところのご質問ということですか。すみません。日詰学長、静岡市がどうして反対をされているのかというところをご説明いただければと思います。

(静岡大学学長)

端的に申し上げますと、ここに書いてありますように、静岡市としましても基本的にこれからいろいろな社会的な課題の解決、それからいろいろな工業集積というものがあるわけですので、そういったものにやはり工学部、情報学部のお力をお借りしたいという方向性があります。したがって、そういったものにうまくコミットできるような大学の体制をとってくれということで、そのことはよく話として伺います。

(浜松市長)

それは再編してもできるのではないですか。

(静岡大学学長)

その辺りの議論は、我々が十分に示しきれていないということもあるかもしれませんが、その辺りをきちんと示していくということは、これから大事ではないかと思っております。

(浜松市長)

私が田辺市長とお話ししたときには、田辺市長は、基本的に大学同士のことでですから行政は介入しませんとおっしゃっていました。日詰学長の判断を尊重しますと私は伺いました。学長との間ではお話になったのでしょうか。

(静岡大学学長)

基本的にそのことについて、私は田辺市長と直接お話ししているわけではございませんけれども、基本的に市の財界の方ですとか、それから副市長とお会いしてお話する限りにおいては、1つは今申し上げたので、要するに静岡大学という大学が培ってきた教育研究の拠点としての力といったものを、先ほど川田先生がおっしゃいましたけれども、それをぜひ静岡の方にもある程度流れて来るような、そういう形が欲しい。

(浜松市長)

だから人材を育成して、それは静岡県内、ひいては日本国内に供給していくわけですから、十分静岡に貢献することになると思いますけれども。そこはいかがですか。

(静岡大学学長)

おそらくそういう形できちんと見えてくると、静岡市も納得する部分はあるのではないかと思います。

(浜松市長)

あるいは新大学と静岡市が協定を結ぶのはいいと思います。協定はいかようにもやりようはあるので、それと大学再編を結び付けない方がいいと思います。

(静岡大学学長)

ただ、今のところ、そのところの理解が十分でないということは言えると思います。

(浜松市長)

理解できないのか理解しようとしめないのか、そこが重要なんですけど。

(静岡大学学長)

私の口からは、その辺りはなかなか申し上げることはできませんけれども、その辺りはやはり十分に理解していくということは、とても大事だということ。それから静岡大学として、これは感情的なところだと言われれば、そうなるかもしれないけれども、やはり総合大学としての静岡大学といったもののステータスを持っていただきたいと。そういうことなのかなと思っていますが。

(浜松市長)

伊東委員。

(フォトンバレーセンター長)

静岡市が、静岡にも工業集積があるので、工学部、情報学部との連携というのも保っていきたいのは、むしろ強めていきたいと思ってらっしゃると思うのですが、そういう希望を静岡市が持っているのであれば、工学部長とか情報学部長とか、あるいはイノベーション社会連携推進機構長とか、そういう人たちを連れて日詰先生が静岡市に伺って、工学部・情報学部の立場とか、これからのスタンスだとか、そういうのをご説明させたらいいじゃないですか。

単に静岡市が反対しているから袋小路だというのではなくて、静岡市は何に懸念を持っているというのをはっきりさせて、それを払拭するような努力というのをこれまでどれだけされてきたのか。そこが私には、ちょっと見えないですね。

その努力を尽くして、もう万策尽き果てたというのであれば、まだ話は分かりますけれども、まだまだやらなければいけないことというのは、いっぱい残っているような気がするんですね。それを5年も6年も放っておいて、今になってくるというのはもう、大学のかじ取りのやり方を変えた方がいいんじゃないか。先ほど申し上げたのは、そういう意味です。

(静岡大学学長)

伊東先生、確かに私が1年半の就任の中で、それができていないと言われれば、それはもう致し方ないことかもしれませんけれども、ただその話に持って行くまでのプロセスというのがございまして、そのためにかなり労力を割かれたということはございます。

今ご指摘いただきましたように、これは斉藤会頭の前で失礼ですけれども、静岡の商工会議所をはじめとして、財界の皆様との対話、これがなかなか大学の場が、特に私自身は財界の方々、特に静岡の財界の方々とお付き合いというのは、そんなにある方ではございませんので、その辺りはきちんとやっぱりやっぺいいかないといけないと思います。確かに今後、その辺りは力を入れてやっぺいいかないといけないということは、伊東先生のおっしゃるとおりと私は思います。

(浜松市長)

他の委員の皆様ご意見いかがですか。

会頭どうですか。

(浜松商工会議所会頭)

私は今日初めて出席をさせていただきますので、今の資料を見て、特にこの前の浜松キャンパス100周年記念式典に行くときにいろいろ調べさせてもらって、たまたまその時も静岡新聞の記事に浜松キャンパスの学部長等3人の方が出ているものですから、川田理事が先ほどおっしゃったように、2大学制の早期実現というのを現場の方は思っているのかなと思います。

今回、浜松医科大学の理事に推薦されてなった関係もあって、浜松医科大学の方のいろいろな収支から将来的な考え方も見て、やはり今進めている医工の連携というのは、強烈にポテンシャルを上げられるのかなと思います。現場の方がこう思っているというのもあって、今日ここに出て来て思ったのは、皆様正しい方向へ現場の方は考えているのかなと思っております。

(浜松市長)

御室委員。合意書を配ってもらったほうがいいのではないかと。

※合意書を追加配付

(浜松いわた信用金庫会長)

今ちょうど皆様のお手元に合意書が配られておりますけれども、合意書、確認書ですね。それをやるということは、その前に当然静岡でもそういうことの議論、あるいは経済界の議論、これは大学だけの問題ではなくて地域全体にかかる問題ですから、皆様そこは議論をされたと思います。その結論として、こういう確認書が出て来たということになるわけ

ですから、それをいまさらね、いや、そうじゃなくてやっぱりそれはおかしかった。それは前の人がやったことだというのは、本来通らない話ではないか。そんなのが通ったら、みんなめちゃくちゃになってしまいますよね。私はそこが少し疑問というか、この合意書を作る前に何の議論があったのかというところを、我々経済界の者としては、何かすごくおかしい。違和感があるなと思っているということです。

(浜松市長)

滝浪委員。

(浜松市医師会長)

私は地元の医師会長として参加させていただいているとともに、浜松医科大学の同窓会の会長としても参加させていただいています。この話、非常に私たち、学生たちの未来をすごく反映しているのではないかなと思います。本当に学生たち、高校生、中学生ですね。期待を胸にしているという感じが非常にします。それと同時に、我々地元医師会としても、この大学ができることによって、地域は浜松のみならず、日本の中での情報の発信性の高さが、我々すごく期待するところがございます。医療に関しましてもそうですけれども。

今医師会でも伊東先生もおみえになっていますけど、情報の方と連携をしたりして、医療というのはなかなか自前の中で動いていることが結構多くて、情報発信という点でちょっと首をかしげるところもあろうかと思っています。

そういう意味でも、工学部、それから情報と一緒にすることによって、いろいろな所へ発信性が高くなる。そういうところをすごく期待していますので、私は本当に一大学のことを考えるのではなくて、未来の人たち、それから我々研究者に対しても、非常に高いメッセージが見られるかなと思います。

引いては静岡大学、100年の歴史を持つ大学が、そこに一緒に先生もやられているように、静岡キャンパスの法学、経済等の学部が一緒になって今度、講演会をやられると思います。そういう動きというのは非常に大事なことになると思うので、本来もうここは決められた合意書でございますので、そこでできない理由を述べるのはやめにして、どうやって作っていかうかということの話をさせていただければ、明日にでもすぐできるという、そういうふうな気持ちでいていただいたほうがいいかなと思っています。非常に期待していることですので、ぜひ肅々と進めていただきたいと思います。

(次世代自動車センター長)

私はこの10月7日に向けて、今回の話の1つの大きなチャンスを与えられたと思っていました。それは市長からそれぞれのキャンパスのビジョンを作り工程表を作ることによって、少なくとも前に進むという、半歩でも1歩でもそういうことが起こるのではないかと、いうことを期待して、私自身もいろいろ話をさせていただきました。

結果的にこの資料が出て来たということがある意味非常に残念で、ここからどうやって前に出すかということを考えないと、今までのまま行ったのでは、ただ言いつばなしになってこれで終わってしまうということが一番懸念しています。

この会議のたぶん 1 カ月ぐらい前に、今野学長とお話をさせていただいて、何で再編が必要かねという話になったときに、その時は今野学長、形がいます。まず作ることが大切ですということを言っていたのが、今日はまず一義的に地域貢献、それから人のためという、その大学の本来の姿を一番最初に言っていただいたことは、非常にこの統合・再編する上で一番大切なことです。何ができるのか、どうやってやらなければいけないのかということから、ぜひ進めていただきたいということ。

もう 1 つは、日詰先生の話の中で一番欠けているのが前向きということでしょうね。前に進めるために静岡キャンパスは何をしなければいけないかということ、ここを出さないとたぶん静岡市も納得しないし、皆様も納得しないと思うんですね。積極的に攻めるといふことをしないと、この話はどうにもならないかなと。その攻めることのできる人を、ここでこれを進めるためには、そういう人が必要になってしまうかもしれないなということを考えながら、今日は聞かせていただきました。私の結論を言うわけではありませんけど、そういうことを考えてぜひ前に進めていただきたいと思っています。

(浜松市長)

はい。議長。

(浜松市議会議長)

前回は、全国議長会の関係で欠席しました。大変申し訳ありませんでした。

大学のことを考えますと、我々の育った時代の大学は最高学府という言い方をされておりましたが、時代の経過とともにアカデミア、なかなかその思いも薄らいできたというようなことが指摘されております。ある方が言うには、1991 年の大学設置基準の大綱化、この辺りから大学が変わってきたと。

高度成長のときは、潤沢な補助金であるとか試験が行われていたわけですがけれども、限られた予算をどう配分していくかということの中で、結局は格付けであるとか、数量的に管理されるとか、そういうことの中で大学が定型化したり均一化してきた。魅力がなくなってきた。同じような大学になってきた。そういうことが、今の経過なのかなと思います。社会情勢を見ますと明らかに少子化であります。人口減少、低成長、こういう時代に大学がどう生き残っていくかということが、これからの大学の課題だろうということでありませぬ。

先ほど配られた資料 2 ページのところ、日詰学長がおっしゃっていた中の、静岡大学が 6 学部の総合大学としての規模を 2 大学に分けてしまうと失うと。地域社会におけるプレゼンスの低下もネックと。こういう表現がありました。私はこれは、こうした社会情勢

を考えますと認識として違うのではないかと思います。要するに 6 学部抱えていないと静岡大学の魅力がないと。もうそういう時代ではないだろうと。

静岡県の中に政令指定都市が 2 つある。静岡と浜松がある。人口でいうと片や 70 万、片や 80 万。こういう所というのは、全国的にはないですね。県庁所在地の名前を冠した大学が明治以降、各地につくられてきて、静岡大学も当然その中の 1 つであります。しかし、この静岡県に限って言えば、少なくとも経済的な、或いは人口の同じような規模のものが静岡市と浜松市がある。そこに浜松に関しては静岡大学工学部があり、そして浜松医科大学がつけられたと。こういうことであろうと思います。

ですから、少子化、低成長の時代に大学の魅力をどう出していくかということからしますと、例えば静岡大学から工学部が切り離されたとしても、残った学部でやっぱり静岡という土地に、どんな魅力の大学をつくっていくかという、学部の新設も含めて考えていくことが大切なのではないかなと思います。

しからば西の浜松の方はどうなのかと言いますと、もうこれ今野学長が言われたことが、私ストーンと落ちまして、大学の使命は、我々のミッションは教育であり研究であり社会貢献だということをおっしゃいました。私が今ちょうど本を持っているのですが、作者のことは言いませんが、この方も同じようなことを言っていて、教育の成果というのは学生個人に最終的に行くものではなくて、それは集団単位で図られるべきものだと。要するに大学があることで、当然学生はそこで学術的に学んで、専門分野に貢献していくわけですが、大学としての、あるいは大学を支える地域、OB、全部そういったものが集団として考察されて、初めてそこに大学の存在価値というか、そういうものがあるのだということ、この方もある大学の名誉教授までやられた方だけでも言っているんです。

私はつくづくそうだと思います、今まで日本の大学というのは、先ほど 1991 年の大綱以来、大変定数的に管理されて削られてきた。そういう中で生き残りをかけてきたということですが、これから本当に考えていかなければいけないのは、どういうふうな特色を出して、どう地域と結びついて、どういう人材を輩出して日本に貢献していくか。それが最高学府としての僕は責任だと思いますので、このまま行くと日本の大学というのは、最高学府になり得ないのではないかなと思っています。

ですから、ぜひ静岡大学をこういうふうな形で学部を編成して残していかないと静岡大学はやっていけないという、そういう視点ではなくて、先ほどから皆様から言われているような、どうやったら静岡キャンパスが魅力ある大学になっていくのか。浜松キャンパスがどうやったら今の時代に応えられて魅力的な大学になって行くのか。そこを建設的に考えることの方が、たぶん何年も何年もかけてこれをやっているうちに、また大学の置かれる環境というのはまた変わって行って、学生から目も向けられない魅力のない大学になって行ってほしくないと思っていますので、そんなふうに前向きに結論を出して行っていただくと思います。

誰が悪い、どこが悪い、こういうふうに合意したのだからこれを守れとかいう、そうい

う次元ではないのではないかと思います。ぜひ、私は日詰学長の時代に、しっかりとしたこの 2 つの大学にして行くと。静岡も納得して、浜松地域も納得していくというような、先鞭をつけていただくということをお願いしたいと思います。

ちなみに静岡の市議会から、静岡大学を分けることは反対だと。浜松の方にそういうふうに言ってくれというようなことを言われてきました。でもそれは別に彼らが言っていることであって、我々の考え方とは違う。こういうことです。よろしくお願いします。

(浜松市長)

他にご意見ございますか。

あまり仕切り屋が意見を言っははいけないと思いますけど、今の太田委員の話で、大変私も納得できる部分でございまして、そもそもこの大学改革のスタートは、ミニ東大みたいな地方大学が全国に散見されて、特徴のないですね。そうではなくて、それぞれが特徴を持って時代を切り開いていくような大学になって行くということが必要であるということが前提だったと思います。

これでよく意味の分からない統合で医学部を入れたとしても、ミニ名古屋大学ができるだけの話で、だったら名古屋大学のほうがよっぽどいい訳でございまして、そういうことではなくて、先鋭的な特徴を持った大学をつくろうと。静岡大学は、申し訳ございませんが、現実的に見てもキャンパスが 100 キロ離れている。そしてもう既に教養学部は全部浜松にありますから、ほぼほぼ浜松キャンパスの学生の皆様は、静岡と日常的な関わりはないわけですね。もう独立した大学が 2 つあると考える方が、私は現実的には、これはもう正しいと思うんですね。

そういう中で今この少子化の中で、また時代が大きく変わる中で先鋭的な大学をつくって、先ほど今野学長が言われたように、教育、研究、地域貢献、これをしっかりやっていく。そういう拠点をつくるんだということ。これは私は大変重要な視点だと思っておりまして、ぜひそういう観点で浜松キャンパス、そして静岡キャンパスの未来図を描いてもらって、そして納得できる形にして行くのがいいのではないかと。

このまま行くと 1 法人 2 大学よりも、これだけ考えたら 2 大学 2 法人の方がいいのではないかと気すらしてまいりましたので、ぜひそこを今太田議長も言われたように、未来思考でリーダーシップを発揮していただきたいなと思います。

(浜松市議会議長)

2 法人 2 大学というのはあり得るのですか。

(浜松市長)

それは今私がぱつと言いました。

(浜松市議会議長)

私もそう思います。

(浜松市長)

それが一番すっきりする。

(浜松市議会議長)

将来的にはそういう選択肢は可能ですか。

(浜松市長)

それは両大学が合意すれば可能だと思います。

(浜松市議会議長)

先ほどの時代の変化とともに、国が大学改革をやってきて、大学が本当に学生にとって社会にとってもいい大学として機能してきたのかと考えると、その数だけで比較してはいけなんでしょうけれども、例えば学術論文の数だとか、世界的に低下してきているという現象があるんですね。それは何かと言うと、学生も自由な研究がきっとできない。要するに補助金が出る分野に集中して研究せざるを得ないものですから、そうすると全く違った、これをやっても成果が出てこないから補助金が見つからないという、多様性が失われていきますよね。

大学の学術機能というのは、多様性を失ったらもう大学としての機能ではなく、それはもう教育機関、単なる教育機関であって、学士を出すだけの機関であって、世界的に通用しないだろうというふうに思いますので、やはり多様性を失わないということは、使命として僕は持っていたきたいと密かに思っているんですね。

だからそのための財源をどう確保していくかというのも、それぞれの地域を含めた大学に、これから課せられた課題なんだろう。国だけに頼るのではなくて、公益財団であるとか、研究機関であるとか、そういう所からも研究資金を集めてやっていくというようなことも、地域でこぞって考えていかなければいけないだろうなと思います。

その中には当然自治体も、おそらく入って行くだろうと思っています。

(浜松市長)

他にご意見ございますか。

滝浪委員。

(浜松市医師会長)

先程からいろいろご意見をいただいています。ありがとうございます。

私たち地域の医師会として、病院等々含めて今コロナで大変な思いをしていますけれども、コロナの中で情報発信をしている人というのを考えてみると、医師もそうですけれども、そういう情報を収集する人たちや技術工学者、いろいろな点でそれぞれのポイントで発信をされて、技術革新をしながらこの大変な状況に対峙しているということです。

そういうことにしても、リーダーシップをとっていただくのはやはり大学ということになりますので、そういう所に集合されたような形態を持って対応していただいて、しかも情報発信をし、研究推進していく所ができると、我々地域としても非常に安心して任せられるなという感じはします。

ですので、ただ単に医学部だったら、ただただ医学の研究をするだけでは、今の時代はもうそれではそぐわないということがございますので、多くの学部で協調して協力して成されるこの浜松のキャンパスは、僕は非常に期待するものは高いと思っておりますので、コロナ 1 つとってもいろいろな対応が必要であるということを、ご理解いただければと思います。

(浜松市長)

他に。よろしいですか。

それぞれ皆様からいろいろなご意見をいただきましたけれども、大変申し上げにくいことかもしれませんけれども、日詰学長には、今日はこういうビジョンを出していただきましたけれども、とてもこの会議で納得できるという状況ではございませんし、浜松キャンパスの思い、地域の思いを学長も汲んでいただいたと思いますので、そうしたものを踏まえて次回、申し訳ございません。もう 1 回こうしたビジョンをご提示いただければと思いますが、いかがでございませうか。

(静岡大学学長)

今日いろいろな角度から大変貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございます。私どもとしましても、今日いただいた意見、非常に多くございますので、それを今後整理させていただいて、やはり学内へ持って帰らないといけませんので、それについてまたお時間をいただいて、両キャンパスの思いというものをお互いぶつけ合っつてということが、私は必要だと思っております、その機会をこれから設けるということで今計画をしております。

その中に、今日私がこの場に出席をさせていただきまして、浜松市の財界の皆様、医師会の皆様、そして関係の皆様、市長をはじめ市議会議長、それぞれの思いがこうだということ伝えないといけないと思っておりますので、そういったそれぞれの立場、あるいはそれぞれの思いといったものを、お互い理解しあえるような関係を作っていく。それが本学にとって一番大事なことじゃないかと思っておりますので、鈴木市長からもそういう方向性の話をいただきましたので、ただ、検討のためのお時間をいただきたいと思いますということで

ございます。これから議論を進めさせていただきたいと考えております。

(浜松市長)

多少お時間がかかることかと思いますが、全く目途をつけないというのも何ですから、年明けの1月ぐらいを目途に、そこはまた事前に調整をさせていただきます。

(静岡大学学長)

すみません。その辺りまた調整をさせていただきたいと思います。

(浜松市長)

そういうことで次回に向けてまた、取り組みを進めてまいりたいと思います。

以上で本日の議事は終了させていただきたいと思います。

4 その他

(事務局(浜松市企画調整部長))

ありがとうございました。

それでは、次第の4「その他」についてです。次回の会議の開催につきましては、今皆様からお話がありましたが、本日の皆様の議論を踏まえまして、後日また調整をさせていただきたいと思います。できれば年明け1月ということでしたので、またその頃に向けて、調整をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

5 閉会

(事務局(浜松市企画調整部長))

それでは、本日はこれもちまして、会議を閉会いたします。皆様、ご協力ありがとうございました。

(終了)